

6/8 金

入管法の迷走

採決は国民への背信だ

疑惑が重なり、採決である状況には到底ない。参院の存在意義が試される重大な局面だ。

外国人の収容・送還のルールを変える出入国管理法改正案をめぐり、政府が不都合な事実を隠したり、事実と異なる説明をしたりしたことが、相次いで明らかになった。

立憲が提出した法相の問責決議案は、与党と維新、国民民主などの反対でそのまま否決された。だが、法案の正当性は大きく揺らいでいる。そもそも矛盾を追及せずに成立を許す」といえば国会の責任放棄で、国民の負託に背くことになる。

先週、表面化したのが、大阪入管の常勤医師が1月、酒に酔つて勤務していた問題だ。様子がおかしく時々のアルコール検査で高い数値が検出された。被取容者への不適切な言動が、かねて指摘されていたという。

一医師の問題ではない。1月

以降、この医師は診療から外されているが、法務・入管当局は「その事実を隠し「常勤医師がいる」と説明してきた。斎藤法相は4月、衆院で「（大阪入管も含む）新たに常勤医の確保に至った」「（医療態勢の）改革の効果が着実に表れている」などと答弁した。入管庁が同月、公表した文書も、常勤医師について「大阪に1人」と現状と違う記載をしている。

ほぼ同じ内容の2年前の法案は、収容中のスリランカ出身の女性の死亡をきっかけに、入管の処遇への批判が高まり廃案になつた。医療態勢は今回も重要な論点で、不祥事があれば率直に公表するのが筋だ。しかし、入管側が「難民申請の乱用」と判断した案件が、特定の參與員にまとめて審査されてくる運用もわかつてきた。斎藤法相は「参与員の発言を支持する文脈で「参与員が1年6ヶ月で500件の対面審査を行つ」とは可能」と述べたものの、その日の夜に「不可能」と正反対の内容に訂正した。政府側の迷走ぶり理解しがたいのは、こうしたも極まっている。

法務・入管当局の不誠実な姿勢を与党が答認し、法案をただち

に採決するが求めている」とだ。政府との緊張関係をあまりにも欠いてはいるのではないか。維新と国民民主も同調し、野党ひとつの役割を忘れ去つたのがやられた。

難民認定の2次審査に携わる民間の参与員が「申請者は難民はほんといない」と国金で発言したことを見緒に、難民認定の公正さにも疑惑が向けられたが、審議は深まつていない。

入管側が「難民申請の乱用」と判断した案件が、特定の参与員にまとめて審査されてくる運用もわかつてきた。斎藤法相は「参与員の発言を支持する文脈で「参与員が1年6ヶ月で500件の対面審査を行つ」とは可能」と述べたものの、その日の夜に「不可能」と正反対の内容に訂正した。政府側の迷走ぶり理解しがたいのは、こうしたも極まっている。

このまま進めたのでは、人々の納得がいとも限られない。

2023・6・8